

関西大学の知られざる人物誌

一 はじめに

戦前の本学関係者については、本学校友会発行の『関西大学を築いた人々』（一九七三年）で詳しく紹介されている。しかし、「人々」の学外での交流関係や、大阪文化への貢献という点には、ほとんど触れられていない。

校友については、まだまだまった記録はない。膨大な卒業生数に合わせて、各界で活躍する「人々」が多く、まとまった記録を作成することは、まず無理であろう。さらに、退学者に目を向けると、戦前では、在学の記録がない場合もあり、「関大退学の著名人」は、本学とは無関係として扱われているのが現状である。特別な例としては、戦前の卒業生の鶴田浩二、志村喬がいる。この二人のような存在は多数おり、その存在を掘り起こすこともまた、本学の果たしてきた役割を考える上で、学園年史には欠かせない一面となるはずである。

本稿では、本学を「築いた人々」でありながら本学年史の表面には出てこないが、日本の文化史の発展に貢献した人々を掘り起こす作業

を試みる。本学の発展に寄与する一方、本学と関わるまでに日本の文化史の一面で活躍した板橋菊松、白川朋吉、退学者で戦前からユーモア作家として活躍した南達彦、関大関係者であるとされる平井蒼太、横山エンタツを紹介する。南、平井、横山は、学園正史には登場しないが、記録されるべき人物である。

二 板橋菊松

稀代のジャーナリスト宮武外骨（慶応三〇昭和三十年）は、明治三十三年四月十二日夜、妻と大阪へと辿り着いた。明治期は大阪市内に暮らし、大正期になり浜寺公園から天下茶屋へ移り住む。大正四年九月十日夜、夜逃げのようにして上京し、大阪での三十四年間の生活に別れを告げた。その間、『滑稽新聞』、『此花』、『日刊「不二」新聞』、『月刊雑誌「不二」』などを発行し、経済人ばかりでなく、多くの大阪文人と交流した。明治末年から、「雅俗文庫」を自宅に開設し、浮世絵などの絵画に興味を持ち蒐集した。大阪画壇の北野恒富、上村松園、島成園たちとも交流を深めた。大阪経済界、文壇、画壇に与えた影響

浦 和 男

は、計り知れない。大阪での外骨の交流関係については、小林一三との関係をのぞけば、ほとんど解明されていない。^①

その外骨は、本学とも少なからぬ縁がある。『滑稽新聞』の筆禍により大阪地方裁判所で戦った相手は、当時の検事正手塚太郎であった。手塚は文久二年生まれ、外骨とは五歳の違いであったから、お互いの立場を越えて近い感覚を持っていたと思われる。新しい時代を切り開く手塚は、大阪の「風俗壊乱」の先頭に立ちながら、やはり新しい時代の社会の先頭に立って騒ぎ立てる外骨に、共感の念を抱いていたようだ。

外骨と手塚が対峙している明治三十五年春、高等小学校を出たばかりの十四歳の少年が外骨の滑稽新聞社を訪れ、弟子入りを望む。板橋菊松だ。板橋は小学校の先生に「無冠の帝王とは文筆生活に携わるのを天職として無位を自負する新聞記者のことである」と教えられ、「無冠の帝王」となり一管の筆で天下を動かす^②。ambition^③を抱かせた一大動機」となり、江戸堀の外骨を尋ねた。(写真1)

この板橋菊松は、戦後本学商学部教授、東京連絡本部長、そして顧問を務めた、関大を築いた人々の一人である。

板橋は外骨の養子として育てられ、妻八節を「おっかさん」と呼



写真1 板橋菊松 (1888~1983)

ぶ。八節は板橋の実家(現在の摂津市千里丘付近)にも遊びに出かけた。「滑稽新聞」を編集・発行する外骨を手伝い、外骨の筆禍にも関わることになる。

三十八年九月、板橋は関西大学に入学する。この年一月、関西法律学校は社団法人私立関西大学に改組・改称している。二年前の三十六年十一月には江戸堀に新校舎が竣工したばかりであった。板橋は、「当時の大学入学式としては珍しかったが、おっかさんがわざわざ付き添ってきて、こまごまと面倒を見てくれた」と述懐している。

権力側の手塚が創設に携わった学校に、養子であり、一番弟子である板橋を入学させ、その弟子は、その後手塚の学校を大きく育てることになった。もちろん、外骨が望んだことではなく、望まなかったことでもない。法律の知識が必要であり、弁護士として活躍することを望んだ外骨に請われて、手塚の作った大学へ板橋を入学させる。関西大学が近隣にあり、法律を専門的に教える学校が本学以外には、関西にまだ存在しなかった、という理由もあった。手塚が権力を笠に着て、市民を苦しめるような検事正であれば、外骨は関西大学をも徹底的に攻撃し、そのような人物が創設に関わった大学に実子同然の若者を入学させたりしなかったはずだ。関西大学が、法律は市民のものであり、市民は法律によってみずからを守るべきだとする態度をとっていたことも、外骨の思想と合うところがあったにちがいない。当時の関西大学には、正義と自由を愛する風潮という意識が高く育っていたことはまちがいない。「権力から正義を守れ」は、この時代には言われていなかったが、この「権力から正義を守れ」こそ、外骨の根底にある思想であった。

しかし、東京に「東京滑稽新聞社」を置くための目的もあり、板橋は、十二月には関大を退学し、中央大学へ転科した。在学中、過労から神経衰弱に陥り帰阪、療養中に「若氣の一徹」から外骨宅を飛び出し、実家にも戻らなかったという。その間の詳細はわからないが、早稲田大学編入試験を受け合格し、再び上京する。四十一年七月に早大を卒業後、阪神間の紡績会社の工女教育に関わったという。外骨は、この間に、顧問弁護士日野国明の実子三千代を養女として迎えている。その後の外骨との関係は、板橋の随想に詳しい。

「四十二年十一月家に着くと、外骨の使の三好幽蘭が訪ねてきて、いきなり私を滑稽新聞の筆禍廃刊後引続き発行している大阪滑稽新聞の主筆に迎えたいというので、ちょっと驚いたが、翻然とさきのわがままを悔い改めて受諾すべきだと考え、十二月一日から元の古巣に戻って、外骨が選んだ筆名『活殺外史』そのままを名乗った。そして外骨夫妻とも毎日なごやかに歓談して楽しかった。これで私の子供の時から『無冠の帝王』の夢が、まさに正夢として現実化したわけである。³⁾」

『大阪滑稽新聞』は、四十一年十一月三日に創刊された。『滑稽新聞』と同じく、説明もなく次々と発禁処分を受けている。板橋が主筆に戻った十二月には、大阪地方裁判所検事局に一戦を仕掛けている。板橋までに主筆が数人交代しており、『滑稽新聞』のような人気のある、そして勢いのある雑誌にはなっていないかった。そこへ、起死回生のために板橋に白刃の矢が立った。

四十四年三月発行第五十七号で、外骨は『大阪滑稽新聞』の全権を田中水也に譲渡する旨の社告を掲載する。本人は、滑稽新聞社と縁を切り、「雅俗文庫」の運営に専念し始める。『滑稽新聞』の成功もあ

って、余暇に浮世絵にこり始め、「雅俗文庫」から関連の雑誌、複製本などを出版することになる。木本至は、当時の「大道事件」との関わりから、このような行動に出たのではないかと推測している。⁴⁾譲渡の一年後、四十四年十二月一日発行第七十五号から、板橋が編集兼発行人となるが、外骨が離れた『大阪滑稽新聞』は完全に衰弱してしま

った。

大正三年九月に田中が病没し、同月十五日発行第百十六号をもって、外骨は滑稽新聞社を解散する。この頃の板橋の経歴は不明だ。随想によれば、経済学者福田徳三に師事したようで、福田が在籍した慶應義塾大学の聴講生になって上京していたのかもしれない。大正九年に京城高商の講師となり、外骨から完全に離れることになる。ジャーナリストとして「無冠の帝王」になりきれない現実が付いたこともあろうし、外骨から引き離そうと懸念する人たちもいたのであろう。板橋は、ジャーナリストから研究者、教育者へと進路を変更した。

板橋は、外骨と当時の社会主義者たち、「大逆事件」関係者たちとの、歴史に埋もれてしまった多数の事実を目にしているはずだ。板橋が外骨について語り出すのは、一九七〇年代末に始まる宮武外骨ブームに合致する。すでに関西大学を離れており、外骨に関する思い出や、表には出てこない事実を、在職中に聞き出せなかったのは実に残念である。

三 白川朋吉

明治三十七年は、宮武外骨と手塚太郎が対峙する頂点の年となった。三十七年早々、『滑稽新聞』は警視の収賄疑惑を攻撃する記事を連載し

た。官吏侮辱罪で起訴され、二月末に重禁固一ヶ月十五日と罰金七円に処せられ、外骨は控訴する。四月末には再び官吏侮辱罪に問われ、最終的に禁固三ヶ月、罰金七円が確定する。四月に手塚が名古屋控訴院検事長として転出することを知り、外骨は三月頃に手塚を告訴する。外骨が誌上で激しく避難した警視の賄賂疑惑について、手塚は、警視は賄賂とされた物品を返却しているので収賄罪に問われないと説明する。外骨は免職を要求するが、手塚は自分の職務ではないと答える。警察内部の情実のために外骨自身を犠牲にした、ということを手塚を告訴したようだ。だが、手塚は法律を曲げて擁護したわけではなく、外骨は自分が犠牲にされたという私憤で応酬する。手塚はぎりぎりのところまで胸襟を開いて外骨に対応し、権力を使って弾圧しようとはしなかった。外骨と手塚の関係は微妙だが、社会正義を乱す大悪人として手塚を扱ってはいない。

四月の控訴審判決の上告を取り下げ、外骨は入獄を発表する。そして、三十七年五月五日午後五時、堺卯楼で入獄送別会を開催する。出席者の中には、板橋菊松もあり、弁護士白川朋吉がいた。



写真2 白川朋吉 (1873~1963)。1936年ごろの撮影か。

白川は、昭和二十七年から三十一年まで関西大学理事長として尽力

し、戦後の発展の基礎を築いた。明治六年香川県観音寺町に生れ、外骨とは同郷だ。(写真2)

明治二十一年医師を志して大阪に来たが法律に転身し、二十七年関西法律学校

に入学、翌年東京法学院(現中央大学)に転入、三十一年同院法科を卒業した。同年弁護士試験に合格し、三十四年大阪で事務所開設する。三十五年江戶堀校舎新築の基金募集委員、四十五年福島学舎の校舎拡張常務委員として、早い時期から関西大学に関わってきた。大正二年大学社員となり、六年に監事に就任、七年大学設置拡張委員、十年から理事として大学昇格問題に尽力するなど経営の中枢に携わり、関西大学は十一年に大学令による大学に昇格する。十一年に大阪弁護士会会長、十四年には大阪市議に当選し市議会議長となり、当時の関一市長を助け、「大大阪」の繁栄にも寄与することになる。昭和三十七年には大阪市最初の名誉市民となり、三十八年一月三十日に八十九歳で没した⁽⁵⁾。本学の中枢にいた時期に、実は外骨との親密な関係が続いていた。

外骨と白川がどのようにして知り合ったかは不詳である。入獄送別会を遡る約二十年前、外骨がまだ外骨ではなく亀四郎と名乗り、十七歳であった十六年八月二十五日の『南海日報』に、高松磊々社から「何求新誌」発行をするとの広告を掲載する⁽⁶⁾。三十日まで広告が出たという。この広告を通して、立原卓蔵という貧乏書生と知り合う。このとき卓蔵は十八歳であった。この立原は、のちに花井卓蔵となり、足尾鉍毒事件、大逆事件など数々の大事件の弁護士を務めることになり、外骨の筆禍の弁護にも携わった。花井を通じて、顧問弁護士となる日野国明と知り合い、そこから白川朋吉も外骨と交際を始めることになったと推測される。

白川の趣味に、絵画の鑑賞と収集がある。関西有数のコレクターとして知られ、その蒐集は明治期に始まっていたという。『関西大学を築

いた人々」によれば、「後に高名な大家となった画家たちも、未だ青年画家で、絵がうれず困っていた人々が多かった。そうした画家が絵をもちこんでくれば、いつでも快く即座に買いとった。その青年画家たちが、昭和になると一流の大家になり、その絵も俄然ぬうちが出たが、その大家たちも、若い時代の困窮をたすけてくれた白川に敬意を表したのである」⁽⁷⁾ そうだ。

外骨が浮世絵に興味を持ち、熱中するのは明治四十年代になつてからである。これが白川の影響であつたのか、白川が外骨の影響を受けたのか、よくわからない。四十五年五月二十五日発行の外骨編集集に『此花』第二十一枝の「花つみ籠」に、「猥褻図書研究大会」の記事がある。大阪日報の記事を引用して、会について説明を加えている。引用された記事に、風俗画も含めた展示をするため、「この秘本の公開は、法律で禁止されてゐるのだからヒヨツとして、抵触してはいかんといふので、白川朋吉クンを法律顧問に嘱託し」云々と書かれ、白川も、このような絵に関心を持っていたことがわかる。⁽⁸⁾ (写真3)

大正二年十月から発行した『月刊雑誌「不二」』には、北野恒富、上村松園、島成園らの絵



写真3 宮武外骨編集『此花』第二十一枝(明治四十五年五月)掲載の「花つみ籠」の、「猥褻図書研究大会」の法律顧問に白川を嘱託したと書かれている箇所。

が掲載される。坂田耕雪、赤松麟作らの絵も掲載され、外骨が大阪画壇の画家たちと交流を深めていたことがわかるが、白川の協力も大きかったであろう。⁽⁹⁾ 白川の妻の母の実家は、船場の筆墨の商家だ。末妹の息子が、洋画家の佐野繁次郎である。白川の実子山川清も、洋画家となつている。山川の府立北野中学の先輩が洋画家の佐伯祐三で、佐伯の第二回の渡仏を援助したのが白川である。⁽¹⁰⁾

『関西大学を築いた人々』によると、白川は「紅灯緑酒の巷に足をふみいれることもあつたが、すこぶるモテたものだという。大正初年に彼の寵妓楽之助との仲は『法律世界(大正二・十一・五号)』のスツパぬくところであつた。」⁽¹¹⁾ そうだ。この点でも、外骨と相通ずるものがある。板橋の関大入学、中央大転学は、白川の助言があつた可能性が高い。

白川が大阪政界、財界とつながりを持つだけではなく、文壇、画壇にも影響を与えた点を考えると、本学と大阪文壇、画壇とのつながりについて、さらに考察を深める必要がある。しかしながら、その著作、記事は少なく、白川については不明な点が多すぎる。

三 南達彦

昭和十年代から三十年代にかけて、「ユーモア作家」として活躍した南達彦の名前を知る人は、児童文学研究者の一部にすぎないだろう。『南達彦集』(『現代ユーモア文学全集18』、駿河台書房、一九五四年)所収の「著者の五十年」に、比較的詳しい経歴が書かれている。

明治三十一年會根崎新地に生まれ、本名を三井七衛という。「中学へは四番で入り、お尻から六番ぐらいで出た。(中略)神戸高商(今の経

大)と大阪高商(今の商大)の入試に滑り、関西大学へ入って中退した。最初は大阪海上火災保険会社に勤務したが、二十四歳で上京し、作家活動をしなから職を転々とする。本人は書いていないが、昭和三年から昭和四年七月の廃刊まで、幼年雑誌から児童雑誌に路線変更する『少年少女 金の星』誌の編集長を勤めた。その後、昭和九年に『新青年』に作品を投稿し掲載されたことから、ユーモア作家としても活躍していた水谷隼の知遇を得て師事、「ユーモア作家」として、多くの「ユーモア小説」を発表した。本人は、「ある歴史作家は僕を『下劣な作家』といふ一語で片付けた」と書いている。当時のユーモア作家たちは、時局柄、「下劣な作家」として、相手にされなかった。戦後も昭和三十年代まで、ユーモア作家として、一般向け、少年少女向けの作品を発表し続け、昭和三十八年に没した。

大阪の「ユーモア作家」というと、漫才作家であった秋田實の名が出ることもある。秋田は漫才台本を多く手がけ、読物としての漫才も多数発表しているが、小説はきわめて少ない。長編の小説は、一本も発表していない。「ユーモア小説」の作品数から見れば、南は大阪出身の代表的な「ユーモア作家」とみなされてよい。しかし、秋田が日本で「第一号の漫才作家」であったのに対し、「ユーモア作家」といえば、辰野九紫、北村小松、サトウ・ハチロー、獅子文六、佐々木邦邦、大御所が多数いた。南は職業作家でもなかったの、大御所たちのように次から次へと作品を発表できなかった。残念ながら、南の著作は本学図書館には所蔵されていない。(写真4)

南がこのような作家になったのは、曾根崎新地の芸妓であった伯母の影響である。伯母からは駄洒落を教えられ、毎月二回ぐらい必ず落



写真4 南達彦の代表作のひとつ『ほことん傳』(大白書房、昭和十八年)表紙。浦和男所蔵。

語の寄席へ連れて行かれ、中学時代も寄席通いを続けたという。その結果が、関西大学入学と退学であるのは皮肉であろう。当時の福島学舎に集まる関大の同級生たちが、南にどのような影響を与えたであろうか。南とほぼ同じ世代で、関大に関わった人物には、文芸方面で活躍する人たちが少なからずいた。

四 本学関係者とされる著名人

南達彦とほぼ同じ世代で、本学の卒業生または退学者とされるが、事実関係が不明である人物は、平井蒼太と横山エンタツである。

四・一 平井蒼太

本名は通、明治三十三年名古屋に生まれ、昭和四十六年に没する。父は平井繁男、関西法律学校の一期生である。つまり、蒼太は江戸川

乱歩の実弟だ。豆本作成、風俗史研究家など、さまざまな顔を持つ。乱歩が広く名を知られているのに対し、蒼太は一部の好事家や研究者に知られているにとどまる。平井蒼太も筆名だが、さまざまな筆名を使い分けていた。

蒼太についての詳しい研究はない。彼の取り組んだ風俗研究も、今は評価されていない。斉藤夜居の『蒼汰の美学』（街書房、昭和四十九年）と『川柳しなの』に掲載された石曾根民郎の「平井蒼太のこと（1）」（3）」（川柳しなの社、四一八、四二〇、四二六、昭和五十三年）が、唯一のまとまった記録である。

富岡多恵子の『壺中庵異聞』（文藝春秋、昭和四十九年）は、「横川蒼太」という人物の評伝である。読めばわかるが、この横川蒼太は平井蒼太のことであり、フィクションの形をしたノンフィクションとなっている。この書中に、平井が昭和三十一年に記した履歴書の反古の話があり、大正十年から昭和十年まで大阪市の電気部試験係として勤め、電気局への入局は「関西大学専門部経済科を修業してから」のことだと書かれているという。本学校校友会名簿には、平井通の名は見つからない。

乱歩が弟たちと東京で「三人書房」という古書店を経営していたことは有名である。乱歩はその店を閉め、大阪時事新報社記者となり、現在の守口市に大正九年十一月から暮らし始める。その後、両親を大阪に残し再び上京、大正十一年七月から再び大阪で生活をする。

乱歩の『貼雑年譜（復刻版）』（講談社、昭和六十四年）を見ると、大正九年の自宅見取図に「通」の名はないが、大正十一年の図には名前がある。大正十三年の図には、「通（この家にて糸さんと結婚式を挙

ぐ。直ちに別居す。）」と書かれている。

平井は大正十年に電気部に入職しており、大正十三年に結婚している。この点から考えると、入職後、福島学舎の夜間部の課程に入学したと考えられる。

平井が風俗研究に取りかかった時期はわからない。『江戸文学研究第一冊』（江戸文学研究所、昭和三年七月）の記事によると、同年に孔本で『耽好（第一冊）』（私家版非売品）を刊行している。それ以前の昭和初期に、江馬務編集の「風俗研究」誌に投稿があるというが、未確認である。昭和四年頃までには、風俗関連の諸雑誌に関連記事を執筆し、名前が広まっていたようだ。『川柳しなの』第五十八号（昭和二十二年二月号）に平井通名で掲載されている「僕の川柳」には、川柳を作り始めたのは昭和三年頃で、もともと江戸風俗に興味があり、江戸軟派研究にとりかかっていたと書いている。石曾根によれば、麻生路郎の句会の同人で、昭和四年十一月に川柳を始めたとしている。江戸風俗の軟派研究に関心を持ち、「末摘花」などの好色古川柳に興味をもったことが、自らも川柳を詠むきっかけであったことはまちがいない。「僕の川柳」の昭和三年頃よりも前から、川柳に手を染めていたにちがいない。

江戸風俗研究の第一人者である江馬務は、当時本学の講師を務めていた。本学で江馬に教わったことが、江戸風俗研究、猥褻風俗研究に取りかかるきっかけとなったのではないだろうか。平井は、自らの経歴について、何も語っていない。乱歩の実弟であるということが、彼の口を閉ざしてしまっている。

平井の代表作は、大阪の花街の娼妓に伝わる呪術を紹介した私家版

の『浪速賤娼志』で、昭和八年に百部ほど出版された。本学図書館には、大阪文芸資料と中村幸彦文庫に各一冊ずつ所蔵されている。また、同年に発行した個人雑誌「麻尼亞」の四、五号が所蔵されている。(写真5)

四・二 横山エンタツ

「漫才」を演芸として確立した漫才師横山エンタツが、本学を卒業している、あるいは退学している、という話がある。残念ながら、本学に、その記録はない。本名石田正見、明治二十九年に現在の三田市に生まれ、その後姫路に転居する。旧制伊丹中学を中退した。

エンタツも自伝を残していない。自伝的記事はいくつかあり、相互の内容に大きな矛盾はないため、本人の記述または発言として扱うことができる。ただし、確認した記事のほとんどが芸人となつてからの話で、本学在学については、現在一点確認しているにとどまる。「文芸春秋」昭和十二年一月号に「わが十五年前」と題する小特集があり、そこに「放浪二十代」というエンタツ名の記事がある。エンタツは自



写真5 平井蒼太の代表作『浪速賤娼志』(私家版、昭和八年)中表紙。旧蔵者は本学図書館に一部旧蔵書が所蔵されている「鬼洞文庫」。浦和男所蔵。

ら漫才のネタを作るような人物であるから、創作記事ではなく、自筆による記事または口述筆記であろう。(写真6)

「十五年前ともうしますと、大震災の年ですから丁度私が二十五歳、始めて東京へ上つて参りました翌年のことにあたります。

私は十九歳の時に芸界に身を投じてから、その年までかれこれ七年の間、四国、中国、九州、朝鮮、満州と西日本をぐるぐる廻りながら、随分と苦勞をいたしました。それは決して旅で御難を喰つたなどと言ふ意味の苦勞でなく―勿論、御難を喰つた思ひ出ならウンザリする程ありますが、―芸界に身を投じたことがそもそも間違つてゐるのではないかと、そんな悲しい反省に絶えず胸を嘔まれておました。と、申しますが、私が芸界に身を投じた動機と言ふのが、全くヒヨクな偶然からでした。

当時、私は大阪の或る私立大学に籍を置いてゐましたが、中学時代



写真6 『エンタツハリキリ漫才傑作集』(大阪バック社、昭和十三年)。エンタツの作ではなく、秋田實の作品と考えられる。浦和男所蔵。

の終り頃からのヤンチャがかうじて、その頃では両親から勘当状態で、仕方なしに野球部合宿舎にごろごろしてゐました。さうした或る日、近くにかかつたてゐた安芝居の喜劇を見に行つたところ、はからずもその一座の役者になつてゐる、郷里姫路の小学校時代の旧友に出会い、色々と話し合ひの結果、その喜劇一座が打ちあげの日には、至極あつさりとその一座について西の方へ旅することになつてしまつたのです。」
 (太字は筆者)

当時の「大阪の私立大学」といえば、本学である。十九歳は大正三年となるので、在学したとすれば、大正三年までであり、大正元年から二年頃に、入学したということになる。学生数の増加と、関西甲種商業学校（現在の関大一高）の設立認可により、大正元年に福島学舎第二号拡張学舎が竣工している⁽¹²⁾。そのような大学拡張期の時期に、エントツは「在学」したということになる。(写真7)



写真7 福島学舎絵葉書。この絵葉書の発行については、本学に記録はない。浦和男所蔵。

エンタツの次男は、吉本新喜劇の名俳優花紀京で、花紀は文学部仏文科を中退している。在学中から作家花登筐と麻雀を通しての交流があり、芸能界入りする。

エンタツの相方としては五年ほどのコンビであった、花菱アチャコの長男は校友である。藤木吾朗生（五郎）、昭和十六年法卒で、在学中は応援団に所属していた⁽¹³⁾。校友会にも、亡くなられるまで熱心に参加されていたと聞く。

五 本学卒業生、関係者の活躍を追う

本学の卒業生、退学者を含め、本学関係者が、その分野で大きな影響を与えていながら、まだ知られていない事例が多数ある。戦前の関係者については、資料が残されていないこともあり、なにかの機会に「関西大学卒」あるいは「退学」と書かれて、初めて気が付くこともある。年史上は、どうしても関西大学の発展に寄与した関係者に焦点を当てることになる。

本学の発展と直接の関係はなくとも、本学の関係者として各界で活躍し、名を残している校友、校友に準じてもしょろしい退学者を掘り起こし、その活躍を明らかにすることは、今後検討される必要がある。本学に短期間でも在学したことが、その人々の活躍のきっかけであるのなら、本学一三〇有余年の歴史の中に刻まれてよいはずだ。そのような人材を送り出したこともまた、年史の一頁に刻まれなければならない。

- (1) 拙稿「大阪の宮武外骨」(『水門』第三十号、水門の会、勉誠出版、二〇二一年)で、宮武外骨が大阪を離れた原因について考察した。拙稿「宮武外骨と大阪文人たち」(『水門』第三十一号、水門の会、勉誠出版、二〇二三年)で、外骨と大阪文人、とくに泊園書院関係者との交流を辿った。拙稿「浜寺の宮武外骨」(『大阪春秋』第一八一号、新風出版、二〇二一年)では、浜寺公園滞在中の外骨について紹介した。
- (2) 板橋菊松「無冠の帝王に憧れて―宮武外骨夫妻と私の奇縁の物語―」、『大阪学院大学通信』昭和五十六年一月号(第十一卷第十号)、大阪学院大学通信教育部、一九八一年。
- (3) 注2と同じ。
- (4) 木本至『評傳宮武外骨』、社会思想社、一九八四年、二九七頁。
- (5) 関西大学を築いた人々編集委員会編『関西大学を築いた人々』、関西大学校友会、一九七三年、二四五～二四九頁。
- (6) 注4、五二～五三頁。
- (7) 注5、二四六～二四七頁。
- (8) この研究会の幹事の一人に、水落露石の名がある。露石は泊園書院で学んでいる。明治四十四年に発足する「大阪文人会」会員五十名の一人で、この会には外骨も参加している。この文人会は泊園書院関係者が多数参加しており、藤澤元造(黄鵠)の名前もある。外骨との交流は不詳。会員の一人に一柳安次郎がいる。当時府立市岡中学の教員であり、石浜純太郎先生が在学中に教わっており、大正五年からしばらく、本学の非常勤講師を務めている。一柳は国学院出身で、のちに外骨と今宮中学教員の折口信夫とが交流するとき

関係している可能性が高い。拙稿「宮武外骨と大阪文人たち」参照。

(9) この月刊誌は、『日刊「不二」新聞』から始まる。新聞時代に、当時今宮中学教員であった折口信夫が記事を執筆している。拙稿「宮武外骨と大阪文人たち」参照。

(10) 山川の二期上が梶井基次郎で、梶井は小学生のとき、外骨邸の前に数年間暮らした。山川と梶井の交流については確認できないが、不思議なつながりが見えてくる。大正十年本学予科入学、昭和二年卒業の画家鳥海青児あおぞめが在学中、白川はすでに大阪画壇と関わりを深めている。鳥海と白川の関係はまったくわからない。

(11) 注5、二四七頁。

(12) 『関西大学創立五十年史』(関西大学、一九三六年)によると、校舎拡張常務委員に白川朋吉の名前がある。

(13) 藤木の在学中の思い出について、関西大学応援団千成会ホームページで紹介されている。http://seinarikaic2web.com/fujiki.html
二〇二二年十二月二十五日確認。

〔資料〕

『大阪滑稽新聞』第八十七号(明治四十五年六月十五日発行)巻末の記事を翻刻紹介する。板橋は、同紙第七十五号(四十四年十二月一日発行)から正式な編輯兼発行人となる。「吾輩ノ告白」は、その後半年以上に渡って継続掲載されたようだ。

本文で述べたように、「大阪滑稽新聞」の編輯人兼発行人が板橋となる背景には、外骨と大逆事件との関係があるようだ。「吾輩ノ告白」が

(うら・かずお 関西大学人間健康学部)



写真8 『大阪滑稽新聞』第八十七号表紙。浦和男所蔵。

半年近く掲載された事実から、板橋自身が外骨と無関係であることを強調し、同時に滑稽新聞社が完全に外骨の手から離れたことを示すことで、外骨と板橋が滑稽新聞社の存続を守ろうとしたことは明らかだ。大正三年九月四日に田中水也が病死し、『大阪滑稽新聞』は第百十六号（大正三年九月十五日発行）で休刊、同時に滑稽新聞社も解散した。「滑稽新聞社」の「北区梅田三百五十九番地」は、『大阪地籍地図』（吉江集画堂地籍地図編集部編、吉江集画堂、明治四十四年七月）でその位置を確認できる。現在の大阪第一ビル南側あたりと推定される。当時は阪急の土地で、小林一三から提供されている。句読点を追加し、旧漢字を新漢字に訂正した。



写真10 同紙巻頭の「才槌頭の君に送る」。「活殺外史」名の記事。「才槌頭の君」は桂太郎のことで、桂を皮肉った一文。

吾輩ノ告白
吾輩ハ大ニ感ズル所ガアツテ、
愈々自ラ進ンデ編輯人兼発行人ト
為ツタ。随ツテ吾輩ハ能ク世間ニ
有ルガ如キ、無責任極マル形式の
ノ署名人デハナイ。自ラ筆ヲ執ル
ハ勿論、編輯発行ニ関スル重要事
務ニモ関係シテ、飽迄モ真個署名
人タルノ職責ヲ完フスベク、堅ク
誓ツテ置ク。敢テ之ヲ読者諸君ニ
告白ス。



写真9 同紙「吾輩ノ告白」。